

生命と人間

——ベルクソンの生命哲学の立場から——

伊藤淑子

(英知大学非常勤講師、哲学)

1. はじめに

生命に関する科学が 20 世紀の半ばから著しく進歩したのに伴い、生命に対する技術も目覚ましく発展しているが、科学技術を社会に適用するに際しては、その妥当性をチェックするために「生命倫理」の立場からの判断が要請されることになっている。生命に対する技術の実行は、それが安全であるのか、そして人間社会にとって必要であるのか、有用であるのか、ということが問題になる。特に人間という生命を対象とする場合には、「人権」「人格」「人間の尊厳」といった観点から科学技術に厳しく歯止めをかけることも少なくない。「生命」に関しては、このように「科学」と「倫理」が対立する場面もしばしば見られる。科学の立場では、あらゆる生物は遺伝子として DNA という分子を共通に持っていることから、DNA という物質の仕組みを研究することによって生命を解明することを目指している。つまり科学の立場では生命とは物質である。しかし人間という生命については、物質に還元しきれない側面がある。人間は理性を持った人格的存在だからである。そこで倫理の登場となる。「人間の尊厳」というような考え方をもち出して、科学者の暴走に歯止めをかけるのである。しかしこの場合の人間の尊厳とは社会的合意を意味しているに過ぎない。科学は有用な技術を次々に生み出し、倫理はその適用が社会にとって価値があるか否かを判断する。これは少しおかしいのではないだろうか。「生き物としての人間」を、生命科学は生命として、つまり物質として理解しようとし、生命倫理は精神として、人格として理解しようとする。デカルト以来の二元論がここでも繰り返されることになる。けれども人間も生き物の一種であるならば、人間という生き物を包括できないような生命観を正しい生命観だとみなせるのだろうか。

このような状況にあって、新しい生命科学の知識に基づいた現代の生命観、人間観を打ち立てようとする動きが、科学そのものの内部に出てきている。DNA の構造と機能を一つずつ分析して生物の部品調べをするのではなく、個々の生物が持っている DNA の中に書き込まれている歴史を読み解くことによって、地球上の生物の進化の過程を調べ、全ての生物に共通の DNA がどのように組み合わされてこれほど多様な生物が生まれたのかを探る試み、そして例えばヒトゲノムの解読を通してヒトがヒトになった履歴を解明しようとする試み、つまり中村桂子の「生命誌」のことである。彼女は科学が一方に研究主体として理性を、他方に研究対象として物質を置き、理性が物質を論理的、客観的に分析して普遍的なものを記述する、という従来の科学にとどまる限り、科学は自然や生命を捉えることはできないのではないかと言う。「なぜ科学はその統一的理解を多様と結びつけられないのか。普遍、統一を求めてきた長い旅が、生命を離れての理性に依拠したものだったとすれば、

それを多様と結びつけ、日常性をもたせる方向への試みは、再び基本を生命に戻す作業といえるだろう。」そして彼女は「生命誌は科学を否定して別の道を示すのではなく、科学の動きを素直に捉えたものにすぎない。物理学を含めて、私には科学自体が誌に移行しつつあり、それは理性から生命への移行と平行しているように見える」と言っている。そしてさらに「理性から生命へ」ということを、彼女は「生き物感覚」の回復として捉えている。

「人間も自然の一員」ということは、20世紀半ばに、地球上の生物はすべてDNAという物質を遺伝子として持ち、同じ祖先から生まれた仲間である、ということをも分子生物学が明らかにしたことで、科学的に証明された。このことを踏まえた上で、中村は現代社会の問題点の多くが、生活の場からこのような「生き物感覚」とでも呼ぶべきものが消えてしまったためにおきていること、科学の成果を応用した科学技術も、そのほとんどはできるだけ生き物離れをして暮らせるようにということを目的にしてきたことに注意を喚起し、「“科学”から“誌”へ。生命を徹底分析して利用しようというのではなく、生命の物語を読み解いて、そこから分かってきたことを活用しようというところまで、私たちの生命理解は進んできたのです。生命を愛おしく思う気持ちを基盤にした社会づくりという新しい文明の構築をするとても面白い時代が来つつあります」と言っている。

では遺伝子という普遍的な物質が、時間とその間の外部とのかかわりの中で実に多様な生物を生み出したのは何故だろうか。様々な生物は何の目的で、どんな基本思想で形成されたのだろうか。このような問いに対し科学者である中村は、生物には「続いていく」ということ以外の基本はないのではないかと推測している。ところで、生命とは生成であり時間であるという現代の生物学が明らかにした事実を、20世紀の初めに主張した一人のフランスの哲学者がいる。「生物は持続という生地できている」と言ったこの哲学者は、生物が組み立てられた目的は「物質の中により多くの非決定性を挿入するため」、言い換えれば自由を実現するためだと主張する。そしてこのような方向性をもった生命の運動を「生命の跳躍」と名づけた。この哲学者の名前はベルクソン（Bergson, H. 1859-1941）。我々はここでベルクソンの生命哲学を明らかにすることによって、現代科学がもたらす生命観とは異なる一つの生命観を提示し、そこから導き出される人間観を示すことで、生命倫理思想に何らかの示唆を与えることができるのではないかと考えるのである。

2．生命と生物

ベルクソンの基本的生命観、それは生命とは意識であり自由である、ということである。物質が必然であるのに対し、生命は自由を意味している。またベルクソンの基本的人間観は、人間の意識は脳から独立している、脳は意識を生み出すことはできない、というものである。このようなことを聞くと、科学者はベルクソン哲学を時代錯誤とみなし、一笑に付すかもしれない。しかし現代の科学も、様々な生命現象、意識現象をその物質的基盤において詳しく分析してはいるが、生命や意識の本質をまだ解明してはいない。このような事態に対し、ベルクソンは、科学は生命の本質を理解できないと言う。ベルクソンの比喻を用いるなら、生命とは鉄屑の山の中を突き進む腕である。科学は腕の貫通によって引き起こされた鉄屑の動きを調べる。鉄屑の山、それが生命体であり、鉄屑の一つ一つは細胞である。鉄屑の一つ一つの動きを克明にたどることで、鉄屑の山全体の形の成り立ちは解

明できる。しかし鉄屑そのものを動かし山をつくったのは腕の貫通、より正しくは貫通の停止である。停止した腕によって生み出されるのがゲノムに相当し（無論ベルクソンはゲノムという言葉を使っていないが）、それが生命体の形成を決定するだろうが、生命の本質は腕の貫通そのものにある。けれども科学はこれを捉えることができない。ベルクソンはこう主張する。DNAの構造分析によって生命体の仕組みは明らかになるだろうが、しかしそれは生命そのものを明らかにしたことにほならない。さらに言えば、DNAの履歴を読み取れば生命の流れを辿ることはできるだろうが、しかしそれは生命の運動の痕跡でしかないであろう。生命の運動そのもの、それを科学は捉えられない、なぜならそれは物質ではないのだから、ベルクソンはこう主張するのである。では生命とは何か。この地上に生物の祖先、原初の生物を生み出し、その後35億年という進化の歳月を経て今日3000万種の生物に到達した、そして人間という精神をもつ生物も生み出した生命とは何だろうか。

ベルクソンによれば、物質とは必然であり、生命とは自由である。しかし生命は物質と結びつくことによってしか、その姿をあらわすことができなかった。従って生命とは物質に働きかける一つの傾向である。生命は初めは物質の必然的な歩みに歩調を合わせながら、磁化された物質を別の道に引き入れようとしたであろう。原初の生物は物質の物理的、化学的習性に没頭した極めて単純なものであっただろうが、そこにはそれを今日の高等な生物にまで高めずにはおかない恐るべき推進力が内蔵されていたに違いない。またこの生物には無数の傾向が含まれていたに違いない。原初の生命は根源の推進力を頼りに物質に働きかけ、様々な系列に分かれて多様な種を生み出していった。従って生命とは絶えず新たな生命形態を創造しようとするエネルギーを意味している。その多くは脱線や後退や足踏みをし、前進したのは2、3の進化系列においてでしかない。しかしベルクソンにとって生命の本質は、この前進する進化運動にある。生命の統一は、時間の流れに沿って生命を推進させる跳躍の中にあり、あらゆる生物がこの生命の跳躍に与っている。

生命の跳躍とは、必然的な物質の中により多くの非決定性を挿入しようとする努力である。従って生み出された個々の生物は様々な程度の非決定性を持っていることになる。ここで我々は跳躍としての生命と、生物という個体における生命を区別しなければならない。進化の推進力である跳躍としての生命は、絶えず新たな個体を生み出す進展し持続する生命であるが、それはある世代の胚から次の世代の胚へと引き継がれていく。つまりこの生命が働くのは、発生段階においてである。ひとたび誕生した生物は、その生物に内属するゲノムのプログラムに沿って物理的・化学的に形成されるだけである。しかしこのプログラム自体は遺伝によって生命の長い歴史が集約されているし、また生物の有機的組織にはその生物の過去が現在の中まで延長して働いて、老化という現象を引き起こしている。生物の現在も過去を引き継いでおり、生物は時間に浸透された存在であり、現在の中への過去の保存、持続を生きているのである。

ベルクソンの生命哲学の特色は、このように、生命が新たな形態の創造を目指して進んでいくときの運動と、この形態が姿をあらわすときの働きを明確に区別するところにある。前者が延長して後者になるのであるが、この二つの運動には決定的な差異があるというのである。この二つの生命をベルクソンは「生命一般」と「生命形態」とも言う。生命一般とは様々な生命形態が共通に持っている存在基盤（DNAのような）とか、様々な生命形態から引き出された一般的性質といったようなものではなく、多様な生命形態を生み出す

原理のことである。そこには「有機界を貫いて進化する力の一つの限られた力である。この力は常に自己自身を乗り越えようとしながら、しかも常に、自分が生み出そうとする作品に対して力不足なものとしてとどまる」という生命観がある。両者の関係をベルクソンは次のように表現している。「生命一般は動性そのものであるが、個々の生命現象はいやいやながらにしかこの動性を受け入れない。」「生命そのものは常に前進するが、個々の生命現象はその場で足踏みしていたがる。」「生命一般はできれば直線的に進みたいであろうが、個々の特殊な進化は円環的な過程である。」「生命の本質は生命を伝達する運動のうちにあるが、生物は一つの通路である。」「生命を種から種への移行としてみるならば、生命は常に増大していく活動であるが、生命の通路としての個々の種は自分の身の安楽しか考えない。」

3．運動と意識

ベルクソンは『創造的進化』（1907）で以上のような生命哲学を展開する前に、我々人間の意識の根底は記憶力であり、それは過去が現在の中に延長して新たな現在を生み出す持続であることを『意識に直接与えられているものについての試論』（または『時間と自由』（1889））において明らかにした。意識とは時間であり、自由であり、創造なのである。ベルクソンはこれと同じ性格を生命にも見出している。生命は自由であり、絶えざる創造である。生命は必然である物質の中により多くの非決定性を挿入し、より自由な生物を生み出すことを目指している。生物は従って行動の主体であり、より自由に動き回るほど、その生物は発達していることになる。但し、生命の自由と生物の自由はその質が異なっていることに注意しなければならない。生命の自由は時間的な自由であり、創造を意味しているが、程度を容れる生物の自由は空間的な自由であって、非決定の自由、選択の自由ではない。

生物はその栄養摂取の違いから、植物は固着性を、動物は運動性を身に付けるに至った。動物の発達には運動能力の発達を意味し、神経系の発達に比例して運動はより精確に、より広範囲になる。ところで動物は自由に動く限り意識的である。意識は躊躇や選択を意味している。従って意識を「生物によって実際に行われる行動の周りを取り巻いている可能的行動ないし潜在的行動の地帯に内在する光」と定義付けることができる。意識は表象と行動の間の隔たりを測る尺度である。行動の表象は、行動が表象にぴったりとはまり込んでいるときには出口をふさがれてしまう。意識は存在していたのであるが、行動が表象を満たすことで中和されるのである。生物の無意識はこのように説明される。意識は運動を導くためにあるが、運動が意識を目覚めさせるのである。

では意識と行動はどちらが原因でどちらが結果だろうか。意識は行動の補助、行動の点じる光であることから、行動の結果だとも考えられる。しかし生命と意識を同一視するベルクソンは、意識が行動の原因だと考える。最も原始的な動物においてさえ、意識は本来は広大な範囲を覆っているが、実際には万力のようなもので締め付けられていると考えてみよう。神経中枢が発達するにつれ、有機体は多数の行動の中から選択することができるようになり、現実を取り巻く多様な潜勢力が呼び出される。すると万力が緩んで意識が自由に通れるようになる。行動と行動との錯綜、葛藤が閉じ込められた意識にとって自己解

放の唯一の手段だったからである。従って意識は行動の道具と言うよりも、行動が意識の道具だと言う方が適切になる。この場合、脳と意識の間には連帯関係や相互依存はあっても、並行関係はないことになる。脳が複雑になるにつれて、意識はその物質的随伴物からはみ出すからである。

以上より、脳と意識は生物が自由になしうる選択の量を、脳はその構造の複雑さによって、意識はその目覚めの強さによって示している事がわかる。従って意識は脳に対応しているけれど、脳から湧き出すのではない。脳のある状態は、それに対応する心理状態の中に行動が生じ始めていることをあらわしている。だから心理状態は、脳の状態よりもいっそう詳しくその行動について語ってくれるのである。

ところで、最も知的な動物、例えばサルの脳と人間の脳は根本的に異なっている。サルも人間もともに学習能力を持っているが、サルが新たな運動を組み合わせる能力は著しく制限されているのに対し、人間はどんな運動習慣でも身につけることができる。制限されたものと無制限の間には無限の隔たりがある。サルが種の習性から逃れることができるのは、新たな習性を作り出す瞬間だけであり、扉はすぐに閉ざされてしまう。サルは自分の鎖を引っ張るが、それを引き伸ばすことにしか成功しない。人間が出て初めて意識は鎖を断ち切った。人間においてのみ、意識は自己を解放した。生命は必然性そのものの物質から自由な個体を創造することを目指し、そのために機構を乗り越える機構を製作しようとした。自然の決定論を利用して、決定論の網の目をくぐりぬけようとした。しかし人間以外では、意識は網に引っかかり、自分が整備した機構の虜になってしまった。人間だけが脳の優秀さのゆえに、意識は生命本来の自由を実現しえたのである。

ここで注意しなければならないのは、生命に二つの形態があるように、意識にも二つの形態があるということである。「目覚めた意識」と「解放された意識」である。「目覚めた意識」とは、生物が持っている非決定性の程度、運動能力に応じて目覚めさせられた意識のことである。それは行動を照らす光であり、「知覚」を意味している。脳が複雑になるに従って選択の幅が広がり、意識の目覚めは強くなる。意識の目覚めが強いほど、生物が一瞬の知覚の中に集約する外界の振動数は増大し、外界に対する生物の独立性が強くなるのだとベルクソンは言う。それに対し「解放された意識」とは、生命の本質である跳躍を意味している。生命個体は外界に適應するために進化のエネルギーを運動能力に転換せざるをえなかった。生命の本質である創造力が姿をあらわすのは、発生の段階においてでしかなかった。人間において初めて、個体の生命が生命の本質を具現できるようになったのである。人間の意識は分流であり弱まっているけれども、根源の生命の奔流を実現している。人間の意識は過去を集約することで独自の現在を創造し、絶えず自己創造を行っている。これが「純粹持続」であり、「記憶力」である。では記憶力と知覚はどのように結びつくのだろうか。また人間の意識の特性である知性は生命とどのような関係にあるのだろうか。

4．生命と意識

『物質と記憶力』(1896)でベルクソンは記憶力に二つの働きを認めている。誕生以来のすべての出来事を一つも漏らすことなく保存しつづける自発的記憶力としての働きと、保存した記憶を現在のために再生する働きである。自発的記憶力は個人の歴史そのもので

あるすべての記憶を蓄積するが、これが我々の「魂」とでもいうべきものになる。これは脳とは独立に存在しているのだが、通常我々はこれを意識することはない。この魂をベルクソンは「純粹記憶力」と呼ぶのであるが、これは実際には絶えず身体と関わりを持っている。過去の全体を現在の中に挿入することによって現在を前進させる記憶力の運動、これが純粹持続である。過去の全体を集約している純粹持続は人格そのものを形成するが、また絶えず進展して新たな自己を生み出す創造のエネルギーでもある。純粹記憶力の本来の働きは、このように自己の全体を緊張させて身体と結びつき、行動において自己を現すことなのである。ここに自由がある。自由行為とは人格を表現する行為であり、自己による自己の創造を意味している。しかし純粹記憶力にはもう一つの働きがある。

純粹記憶力は無数の記憶を相互浸透させ一つの人格へと統合するという働きと共に、記憶をばらばらに分け、現在の現実に関わるものだけを取り出し、残りは闇の中に放置する、ということも行っている。我々の現実の知覚は、現在の知覚に関係のある過去の記憶が多数侵入することによって、慣れ親しい私の世界の知覚になっている。知覚とは通常再認のことであり、過去によって解釈されることで、現在の知覚は人間的意味を帯びた判明なものになる。純粹記憶力はこのように知覚と記憶を結びつけることによって判明な知覚を作ったり、現在の表象と過去の表象の間を行き来し、実用の観点から適切なものを選んで結びつけて一般観念を形成する。ここに知性が成立する。

以上より純粹持続においては、記憶力の集中によって過去の全体が相互浸透し、一つの傾向となって行動において現れるが、知性においては、記憶力の分散によって過去の一部が選ばれ、表象として意識の光の下に現れることがわかる。そして意識の本質は知性ではなく純粹持続であること、表象ではなく行動であることがわかる。なぜなら我々は集中から分散に行くことはできるが、分散から集中に行くことはできないからである。我々の意識生活の根底には、内的生命として純粹持続が存在している。しかし通常我々はそこに浮かび上がる知覚や観念だけを意識している。意識は外界の事物に働きかけるため、物質の習性に自己を適応させ、物質の習性に自己の全ての注意を注いでいるからである。人間の意識は純粹持続を忘却し、自己を知性として規定することになったのである。

では知性とはいかなる生命であろうか。ベルクソンは『創造的進化』において、生命に内在する力は本能と知性として開花したことを明らかにした。両者は初めは融合していたと思われるが、発達するに従って次第に分岐した。けれども決して完全に離れ離れになってはいない。自然は節足動物において、明らかに本能に向かって進化した。しかし昆虫の最も完全な本能にも幾分知性のほのかな光が伴っている。他方、知性は本能が知性を必要とする以上に本能を必要とする。知性が働くには、既に高度の有機的組織が動物のうちになければならないが、本能の翼を借りなければ、動物はそこまで上昇しえないからである。それゆえほとんどの脊椎動物において、知性の開花より知性の探求が見られるのであるが、人間に至って初めて知性は自己を我が物にすることができたのである。

本能は有機的道具を形成し、それを利用する能力であるのに対し、知性は無機的道具を製作し、それを用いる能力である。本能の道具はひとりでの作られ、ひとりでの修復される。この道具は要求された仕事を望ましい瞬間に、完璧にやり遂げる。その代わり、この道具はほとんど普遍的な一つの構造を保っている。それゆえ本能は必然的に専門化している。それは一定の目的のために一定の道具を使用することしかない。それに反し、知性によっ

て製作される道具は不完全な道具である。それは努力と引き換えにしか手に入らない。しかしそれは無機物でできているのでどんな形にもなりうるし、どんな用途にも役立つ。それは新たに生じるあらゆる困難から生物を救い出し、限らない能力を生物に付与することができる。この道具は一つの要求を満足させるごとに、新しい要求を生じさせる。それゆえ本能の場合には行動圏が閉鎖的になり、動物はその圏内で機械的に動き回るのに引き換え、この道具は製作者に無限の領野を開き、活動をますます遠くにまで推し進め、ますます自由なものにする。

本能と知性のこのような活動様式の違いから、それらが保持する認識は根本的に異なったものになる。本能は共感であり、その認識は素材、事物に向かう。知性は対象を外から捉えるので、その認識は形式、関係に向かう。本来知性は無機物的固体を対象としているので、非連続なもの、不動なものしか明白に表象することができない。知性は有機的なものに対しては、無機的なものに分解することしかできず、生物を無生物として扱ってしまう。知性は物質に外から働きかけるために作られているので、生命については本質的に理解し得ないのである。

5．生命科学と生命哲学

実証科学は知性の所産である。知性は自然的論理の形で潜在的な幾何学的傾向を身につけている。この傾向は知性が惰性的物質の中に入り込むに従って、いっそうはっきりしてくる。知性は物質と調子が合っている。そこで知性が生命の研究に着手するときも、知性は生物を無生物として取り扱い、この新しい対象に物質に対するのと同じ形式を当てはめ、この新しい領域の中に、物質の領域で成功を収めたのと同じ習慣を持ち込む。しかしこうして得られた真理は、外界を支配しようとする我々の行動能力に依存した、象徴的な真理ではない。生命を分析すれば、ますます多くの物理・化学的現象が発見され、化学者や物理学者はそれに執着するであろうが、化学や物理学が我々に生命の鍵を与えてくれることにはならないのである。科学は生命の進行中の活動を固定したものとみなし、それに外から働きかけて分解し、無限に多様な諸部分と、無限に巧妙な秩序を示すにとどまる。曲線の極めて小さな一要素はほとんど直線に近い。この要素を小さくとるほど、ますますそれは直線に類似しているであろう。極限までいけば、この要素は直線の一部であるとも、曲線の一部であるとも、好きなように言うことができよう。事実、曲線はその各点において接線と見分けがつかない。同様に、生命性はどの点においても、物理的、化学的な力に接している。けれどもそれらの点は、要するに、曲線を生み出す運動のあれこれの時点を一時停止させてみる精神の眺めでしかない。事実、曲線が多くの直線から成り立っているのではないのと同様に、生命も物理-化学的な諸要素からできているのではない。

科学は我々の行動を事物の上に広げるはずのものであり、また我々は惰性的物質を道具としなければ行動することができないのであれば、科学は物質を扱っていたときと同じように生物を扱うことになる。けれども科学が生命の深みに入り込むにつれて、科学が提供する認識が次第に象徴的なものになり、行動の偶然性に依存するようになる。この新しい領域においては、哲学が科学の後をついていき、科学的真理の上に形而上学とも呼ぶべき別種の認識を重ね合わせなければならなくなる。ベルクソンは科学と哲学を結び付け、そ

れを次第に発展させることによって、我々は存在そのものに、しかもその深みに到達すると主張する。では哲学はどのようにして生命を認識するのだろうか。

本能は生命が物質を有機化するときの働きを引き継いでいるだけであり、生命の形式そのものに基づいて形作られている。我々の意識の中心には知性が輝いているが、その周りには漠然とした、ほとんど消え入りそうな本能の微光がある、とベルクソンは言う。この本能を強化し内面化して認識とするならば、本能は生命のもっとも奥深い秘密を我々に見せてくれるであろう。これが「直観」である。直観とは知性の探究心に刺激され、利害を離れて対象を無限に広げ、自己自身を意識するようになった本能のことである。直観は一方では、知性の機構そのものを利用して、生命においては知性的な枠組みが厳密には適用されないことを示すとともに、他方では、自己の働きそのものによって、知性的な枠に変わらねばならないものの感情を暗示してくれる。言い換えれば、直観は一方では、生命が「多」の範疇にも「一」の範疇にも入らず、機械的な因果性でも目的性でも説明しきれないことを知性に示すとともに、他方では、我々と他の諸生物の間に共感的な交わりを打ち立て、また我々の意識を拡大させることによって、意識の本質は知性ではなく純粹持続であること、純粹持続は行動能力であり、生命本来の領域に属すること、従って生命の本質は相互浸透であり、不断の創造であることを明らかにする。

直観に基づくこのようなベルクソンの生命観は、中村桂子の「理性から生命へ」、あるいは「生き物感覚」と呼応していることに我々は気がつく。生命を扱う科学は、発達するにつれ哲学的様相を帯びざるを得なくなったということであろう。中村は生命を、「細胞内に置かれたゲノムの働きによって自己創出するシステム」「時間の中で生成してくるシステム」と表現している。しかし意識に関しては、ベルクソン哲学はいっそう大胆である。科学の立場では、生命というシステムが生命とは異なる脳というシステムを生み出し、脳が意識を現象させている、と考えられている。然るにベルクソン哲学においては、我々の意識は生命そのものであり、脳が意識を生み出すのではなく、意識が脳を利用して判明な知覚を形成したり、物質に働きかけたりするのであり、さらには人格的な意識が自由な行動を展開するための道具となるのである。

「人間という生き物」をこのように理解するベルクソンの立場からすれば、社会はどのように科学技術と向き合うべきであろうか。今日の生命倫理の諸問題に対する答えを、ベルクソン哲学から直接に導き出すことは難しいけれども、生命の本質は物質ではなく人格であり、精神の本質は知性ではなく創造的生命だとするベルクソンの生命観、人間観は、生命倫理のあり方に一つの方向を示すことにならないだろうか。最後に、ベルクソンは『道徳と宗教の二源泉』(1932)において、我々人類が進むべき方向として、「簡素な生活」を提唱している。科学技術は先進諸国においては身体的な生活を十分に豊かにした。科学技術はこれからは精神的な豊かさのために用いられるべきであろう。それは全世界の人々が、同じ人間として等しく安心した生活を営み、多様な文化の中で生きている多様な人々が、共に「生きている」という喜びを分かち合える社会を築いていくことではないだろうか。

参考文献

Bergson, H. : *Essai sur les donnée immédiates de la conscience*, PUF, 1970 [平井啓之

訳『時間と自由』、白水社、1970]

Bergson, H. : *Matière et mémoire*, PUF, 1968

[田島節夫訳『物質と記憶』、白水社、1970]

Bergson, H. : *L'Évolution créatrice*, PUF, 1969

[松浪信三郎・高橋允昭共訳『創造的進化』、白水社、1968]

Bergson, H. : *Les Deux Sources de la Morale et de la Religion*, PUF, 1969

[森口美都男訳『道德と宗教の二つの源泉』、中央公論社、1969]

中村桂子：『生命科学と人間』、日本放送出版協会、1989

中村桂子：『生命誌の扉をひらく』、哲学書房、1990

中村桂子：『生命科学から生命誌へ』、小学館、1991

中村桂子：『自己創出する生命』、哲学書房、1993